

第5回「八日目の蝉」

一生い立ちを受け入れる旅一

川崎 二三彦



今年は何度か「MET ライブビューイング」に出かけた。ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場(MET)での最新オペラ公演を、年間10本あまり上映する企画だ。幕間の休憩もちゃんとある上、その時間帯に客席や舞台裏の様子を映したり、指揮者や演出家、出演者等にインタビューするサービスもあって、時には珍しい話が飛び出すこともある。この前見た「オリバー伯爵」のタイトルロール、フローレスは「いやあ、さっき妻が出産したんです。昨日から全然寝てません。ベビーの顔見てから楽屋に飛び込んだんです」と言うのでびっくり。料金は3,500円、映画にしてはとやや高いが、オペラの疑似体験に裏方ウォッチングを足したような楽しさはなかなか得難いものだ。などと言う間本編開始のベルが鳴る……。

この映画、ほんまは観る気なかったんよね。予告編で「誘拐犯に育てられたとあって、特殊すぎて」なんて台詞を聞かされるたび、「これって集客用のあざとい宣伝じゃないの？」と勘ぐってたから。

確かに「八日目の蝉」とはよくも閃いたもんや。蝉は羽化して1週間で死んでしまう。それが八日目も生きてたら、^{ほか}他の蝉が見ない光景を見るって意味らしいけど、心憎いタイトルですわな。けど、「父の愛人だった誘拐犯に、これ以上ないほど心優しく育てられる」なんて、八日ぐらいじゃとても起こらん。ホントは「十日目の蝉」ぐらいがいいところじゃないやろか。どだい設定に無理があるんですよ。

とまあ愚図愚図言いつつ……、

＊

「お母さん、お星さまの歌をうたって」「いいわよ！」

犯人が逮捕され、4歳になった娘をようやく我が手に取り返した母なら、精一杯「キラキラ星」とか歌いますよ、そり

ゃあ。ところがこっちは早くもため息。次の展開が読めますからね。

「それじゃないの！」

完ペキ想定内でしょ。ご丁寧に後で謎解きもしてくれたけど、娘が望んだのは犯人、すなわち養母がよく歌った「見上げてごらん夜の星を」だった。

そやから母の感情が決壊するのも必然やろね。大暴れですわ。父が必死で止めるけど、もとはとえばこの人の不倫が発端なんやから収まるものも収まらへん。そこへだめ押し。

「お母さんごめんなさい」「お母さんごめんなさい」「お母さんごめんなさい」

泣きじゃくりながら、ただただ謝罪の言葉を繰り返す娘。

「わかった、もうわかったから次のシーンへ進もうよ」

こっちは耐えかねて先を急ぎたいのにこの台詞、永遠に続くかのように感じられましたなあ。ふう、思い出すのも息苦しいけど、それはまあ、ある意味すごい現実感があったから。児童虐待なんかで



も、家族誰もが行き場をなくして追い詰められることって、なんぼでももあるわけやからね。子どもの必死の形相に、母親がますます激高するんはようわかります。それにしても、映画館に来てまでこんなシーンを見なくちゃならんのかねえ……。

*

ところでこの作品、楽しいところもありますな。追われる身の犯人が子どもと一緒に匿まれる現代風駆け込み寺「エンジェルホーム」のエピソードですわ。余貴美子演じるホーム代表の一挙手一投足に思わず吹き出したけど、いかがわしくて現実離れしているところが、かえってこの映画にはふさわしいんやろね。こういう場面があると、ホント2時間半の上映時間もあつという間。まあ、うまいこと作ってるんでしょ。

それに、突然現れ「事件のことを本にしたい」と無遠慮に持ちかけるルポライターも、なかなかよくできていましたな。本作のテーマの一つは、“特殊すぎ”る生い立ちをいかにして受け入れるんか、ということなんやろと思うけど、もしも

こんなことが実際にあつたら、^{おおはや}大流行りの心のケアなんかを標榜しつつ、したり顔で出てくる専門家が必ずいるはずや。

ところが彼女（小池栄子扮するルポライターのこと）は^{まぎやく}真逆。突然待ち伏せして声をかけ、自分本意の関心で突っ走り、アパートに入り込んで勝手に冷蔵庫を開けてムシャムシャ食べ始める。でもまあ、観客を^{いざな}誘い物語を進めていくには、多分こういう人物が必要なんやろし、誘拐犯に育てられた主人公恵理菜（井上真央）が、自身が育った土地と自らの生い立ちそのものを旅するためには、きっとこんな役回りの人間がいるんやね。あつ、これって現実でも同じかな？

*

要するに本作は、「誘拐したのは父の愛人だから…」とか「誘拐犯に育てられた人間は…」なんぞという興味で覗き見たってあかんです。そんな不自然さを横に置いてああやこうやと理屈をこねる^{もん}者もいるみたいやけど、そんな話には乗れまへんなあ。

だってそうやろ。観客はラストシーンで恵理菜が下した決断に救いを感じると思うけど、そんな思いは何も、特殊な人生を歩んだ彼女だけに起こることじゃないんやから。

とはいえ、やはり奇をてらった、売らんがためのあざとい小説なんや、原作は。

「こんな本、絶対買わん」

と呟いてふと鞆を開けてみたら、アレ、いつの間にか文庫本が…。

鑑賞データ：2011/05/11 横浜ブルク 13

*公式HP <http://www.youkame.com/index.html>

*Twitterへの投稿 <http://coco.to/movie/8793>